

NINAGAWA 千の目

毎日テレビで見ない日はないほど、超売れっ子の笑福亭鶴瓶さんが今回のゲスト。彩の国さいたま芸術劇場大ホールの舞台上でたっぷり1時間、戸惑う蜷川さんを巻き込んで2人は座らずにマイクに向かって、漫才ならぬ、公開トーク。その話芸に蜷川さんもたじたじの場面もあり、満員の場内をおおいにわかせた。

Photo: 宮川舞子

何で9時間もの芝居をしてしまうの？ お客さんのほうも変態だと思いますよ

蜷川(以降N) きょうは天才を呼びます。どうしてもお話を聞きたくて、お手紙を差し上げました。鶴瓶さんです。(拍手)

鶴瓶(以降T) どうもどうも。鶴瓶でございます。天才って、いやいやもう災いのほうの天災ですよ。(舞台上の椅子を指して) 蜷川さん、座りますか。

N はい。僕は立っていると何か落ちつかない。

T 僕は長いこと話をしていますけど、座るとゆっくりになるんですよ。それはそれでいいんですけど、立ったほうがおもしろいじゃないですか。漫才マイクみたいなのがあったら一番いいんですが、出ます？あ、出ましたね。(舞台上に急遽、スタンドマイクが用意される)

N まずいな。まるで漫才だよ(笑)。

T 何か居心地が悪そうですね(笑)。いいじゃないですか、しゃべりなはれ。

N お客さんで扇子を使う方がいらっやいますね。あれはお話をしている気になりませんか。

T 気にしたらもうすべてが気になりますから、全然ですね。何でもあります。

N 僕は気になって、客席が対面式の芝居をやったとき、反対側のお客さんがしょっちゅうパタパタとやっているの、そばに行くと、「ちょっとすみません、扇子は使

落語家

笑福亭鶴瓶

わないでください」とお客さんに注文をつけたことがあります。

T 演出するときは、ここはこうしろとか役者にいろいろ言うてるわけでしょう。若い役者とか。僕もそうですけど、やっぱり怒られたいんですよ。

N うそだ。

T いやいや、本当ですよ。でも、蜷川さんは愛されるでしょう？ ガーッと怒っていても、何か愛されるんですよ。どこかこい

つにちょっと怒られたいというか。

N いいえ、憎まれています(笑)。

T この前、『コースト・オブ・ユートピア』という9時間の芝居がありましたね。何であんな芝居してしまうの(笑)。あれを観に行く人たちがまたすごいわ。僕は堪忍して言うて、それだけは観に行くのを断りましたよ。9時間なんてもう変態じゃないですか。お客さんのほうも変態だと思いますよ。9時間ずーっと観てるんですよ。



「やっぱり立ってしゃべるのもいいでしょう」(鶴瓶)



「何かきょうは僕が演出されましたね」(蜷川)

彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督・演出家

蜷川幸雄

N 何か楽しいみたい。舞台の休憩時間にみんなで一緒にご飯を食べたり。

T それはすごく大事なことで、昔、歌舞伎は通しで朝から晩までやっていたから、丁稚でもみんな、ちょっと抜け出して観に行くとかそういうのがあったけど、今はもうみんな忙しいじゃないですか。それを9時間も劇場へ来さしたり、見さすということは、すごいことやと思います。でも、ちょっと自信はあるでしょう。俺は9時間

でも、来たものには損はさせないという。

N あると言わないと(笑)。

T 1カ月間も劇場に芝居をかけていると、人が来るのか来ないのか、心配でしょう。

N そうですね。入っていればそりゃうれしいです。

T やっぱり口コミで来るんですか？ここまで来る、いや、ここまでと言うと失礼ですけど、さいたまのここに来るんですよ(笑)。ここまで足を運ばすんですよ？何で

やろうと思います。『ムサン』でも僕はここに観に来たんですから。ありがたいと思ってるんですか？

N はい、思っています(笑)。だからお客さんへのお礼として、鶴瓶さんに来てもらいました。

T そんな僕関係ないじゃないですか(笑)。僕もここに観に来てるんですから(笑)。でも蜷川さん、何ほ元気や元気やといっても、えらい齢でしょう。普通なら、74歳だと公園を歩いておこうとか、足腰を丈夫にするために歩いて、夜は9時ぐらいに寝ますという生活ですよ。

N 昨日まで大阪にいました。一昨日の夜に『ガラスの仮面』の初日を開けて、帰ってきました。

T そうですか。大阪弁はおもしろいでしょう。

N 同じ言葉を使っても、大阪弁を使う人のほうが上手に聞こえますね。東京の言葉はニュアンスがない。細かい、波が少ない、ぶっきらぼう、平板に聞こえます。

T ごまかしやすいんですよ。今回、ハリウッドのアニメ映画で『怪盗グルーの月泥棒3D』の主役の声をやったんですが、アニメの口に大阪弁を合わせなあかんんですよ。アニメはごまかせないですよ。大阪弁は、セリフの前に間をあけたり、ちょっと笑うんですよ。すると間が計れてごまかせるのに、アニメのおっさんの顔は笑ってないんですよ(笑)。だから合わない、ごまかしようがないんですよ。あれは難しかったですね。

維新派が再びやってくる

「台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき」が、彩の国に登場する。精錬所の廃墟がまるごと舞台美術になった犬島公演から、緊密な劇場空間での公演へ。もうひとつの維新派を体験できる格好の機会だ。

維新派 〈彼〉と旅をする20世紀三部作 台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき

When a Gray Taiwanese Cow Stretched



第一部 [nostalgia] photo:清水俊洋

芸術監督・蛭川幸雄をも驚愕させた維新派。

僕は、松本雄吉さんと維新派のファンです。大阪の南港で、はじめて維新派の舞台を観た時に、その素晴らしさに圧倒されました。僕にはこのような作品はとうてい演出することはできません。その固有の美しい舞台をぜひ多くの皆さんに観ていただきたいと思っています。他の演劇とはまったく違った新しい劇的な体験をさせてくれると信じています。

蛭川幸雄



年間100席はやらないと落語はよくなる 一番嫌やと思われている人のところで『子別れ』を覚える

N 落語家の方で、俳優としてもうまい人はなかなかいません。でも、鶴瓶さんはうまいと思います。落語家の方は、落語のときも何やっているときも、1人でいつもいろいろな役をやっているから、こういう対談のときに、何か自然ではないように思いますが、鶴瓶さんにはそういうのがないですね。

T 僕は松鶴師匠のところに入りましたが、ずっと稽古をつけてもらえなかったんですよ。それはそれでまあええかと。いや、もちろん落語はしたいですよ。だから落語もやってましたけど、そんな本格的ではなくて、頼まれたら一つのネタを覚えてポンと入って、変な話、そこはそこでバラエティで慣れてますし、お客さんは笑いますよね。でも、それはなんぼネタがあっても、1回ずつの捨ててみたいものです。次につながらないんですね。

あるとき小朝さんから、枝雀師匠も志ん朝師匠も亡くなって、大阪も東京も落語の火が消えているというので、落語をやってくれへんかと言われました。それも国立劇場で、『子別れ』と『化け物使い』という噺を指定され、ずっと断ってたんですけど、もうええわ、やりましょう、1回だけやりますと。

やるとなったら必死になりますよ。初めて東京で落語をしますから、これはどない

かせなあかんと。『子別れ』を覚えようと、桂文紅という大師匠のところへ尋ねていきました。あまりしゃべったことないし、多分僕のことを嫌いというか、昔からマスコミに出てる落語家が嫌いだという先入観がありました。あえてそこへ行こうと。一番嫌やと思われている人のところに行くと、一番底辺から入れますから。毎週土曜に通って、ようやく高座にかけていいと言われてもらいました。それからずっと僕が『子別れ』をやるときには、舞台横でメモしはるんですよ。でも何も言わないんですよ。師匠が言うまではこっちは聞けないですから、「ありがとうございました」と。そしたら、だんだん好きになってくれはって、2月の寒い日、師匠の会があって、僕は中とりで『子別れ』をやったんですけど、その会場は舞台袖がなくて、師匠は雪が降っている外で立って聴いてくれてたんですよ。終わった後、雪の中で「オーケー、よかった」と言ってくれたんですよ。感動しましたよ。こんな僕をあまり好きだと思ってなかった人が、ずっと聴いてくれはって、最後は「よかった」って言うてくれたことが自信につながるんですよ。だから、役者も蛭川さんに「いいよ」と言われたら、ものすごい自信になる。

N たまに言いますけど。「おまえなんか死んじゃえ、存在が許せないんだよ」なんて言葉ばかりです(笑)。

T うちの師匠は「もう頼むさかい。やめてください」と言うんです。一番怒られるときは敬語を使われるんですよ。「お願いします」と。ガーンと怒られるよりこれが一番つらいですね(笑)。今は落語をやるようになりましたけど、タクシーに乗っても「落語はせいへんやろ」とかずっと言われ続けてきたんですよ。志の輔さんや小朝さんなんか、年間300席するんですよ。僕はその当時、7席ぐらい。向こうはイチローで、こっちは阪神の川藤ぐらいですよ(笑)。レギュラー番組を今8本やっていて、去年は74席しかできませんでした。今年は100席いきます。やっぱりそれぐらいやり抜かないと、よくならないですね。今せえと言われてできる落語がこれまで7本ぐらいしかありませんでしたけど、今は43本あります。

N それはもう完璧に覚えているの？

T 覚えているというか、自分の中に入っているというのが17ぐらいで、できるというのは43本あります。落語は何で忘れないんでしょうね。映画のせりふはもう忘れちゃったよ。

N 僕は演出プランをすぐ忘れます。

T それはそうですよ。ぎょうさんやるでしょ。日本で初日をあげたと思ったら、イギリスに行っているとか。一体どんな老人ですか。

N いやいや、ボケ老人。何かきょうは僕が演出されましたね。

T でも、やっぱり立ってしゃべるのもいいでしょう。

N (笑)。ありがとうございました。

(2010年9月4日 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール)



笑福亭鶴瓶 Shofukutei Tsurube

落語家。1951年生まれ、大阪府出身。1972年に6代目笑福亭松鶴に入門。以降、テレビ・ラジオを中心に活躍し、現在は、『A-Studio』(TBS系)、『ザ!世界仰天ニュース』(NTV系)、『鶴瓶の家族に乾杯』(NHK)などラジオ・テレビを合わせて8本のレギュラー番組をもつ。また近年は映画『ディア・ドクター』『おとんと』などでの演技力が高く評価され、魅力的な俳優としての一面もみせる。現在公開中の映画『怪盗グルーの月泥棒3D』では、声優にも挑戦している。